



カケス



カイツブリ



オオヒシクイ

四季の移ろいを知らせる 余呉の野鳥たち

豊かな自然に恵まれた湖北。とりわけ野鳥の姿は、私たちに四季と自然を感じさせてくれる暮らしのアクセントです。余呉、湖北の鳥たちの生態について、余呉で生まれ育ち、地元の自然に詳しい日本自然保護協会自然観察指導員・布施善明さんと、湖北野鳥センター、琵琶湖水鳥・湿地センターの専門員・清水幸男さんにお話をうかがいました。

Enjoy Bird Watching



余呉は野鳥の宝庫カケスのどんぐり集めが冬の到来を告げます。

余呉の高時川流域は、わざわざ京阪神からも愛鳥家が訪れるほどの野鳥の宝庫です。「山と川の自然に恵まれ、《谷》状になっているからでしょうね。いろんな鳥がいます。中でも愛鳥家に人気があるのは、アカシヨウビン、ヤマセミ、カワセミなど小魚を食べる仲間。特に高時川に見られるヤマセミはファンが多いですよ」(布施善明さん)

鳥には特定の地域に留まって生きる「留鳥(りゅうちょう)」と、山から里、里から山へと狭い地域を移動する「漂鳥(ひょうちょう)」と、そして季節によって長距離を移動する「渡り鳥」がいます。

「余呉の代表的な野鳥としてカケスがいます。これはとてもユニークな鳥で、他の鳥の鳴き声をまねたり、ドングリをノドの中に3〜4個入れて運び、木の下などに隠したりします。越冬のときの食料にするのですね。カケスが盛んにどんぐりを集め始めた冬が近い証拠。どんぐり集めはカケスの《冬のしつらえ》といえます」

鳥に縁の深い余呉だけに、鳥に関する面白い伝承も残っています。

「余呉町、特に坂口一帯には『ニワトリを飼わない』という面白い《掟》が、二代前まで生きていたんですよ。この地は菅原道真公ゆかりの地。道真公が一番鶏を合図に太宰府へ流されたことにちなんで、鶏を飼わなくなったんです。実際、今でもニワトリの姿を見ることはほとんどありません。特に雄鶏はね」

最近では環境の変化とともに、鳥たちの生態も変わってきています。

「高時川流域に多いセキレイは、かつてはきちんと棲み分けをしていました。水の



湖北野鳥センター(左)琵琶湖水鳥・湿地センター(右)湖周道路沿いの湖北町水鳥公園内にあり、琵琶湖水鳥・湿地センターも併設されています。同センターは水鳥を保護することが目的です。主に琵琶湖湖岸に多い水鳥の生態を学び、多くの人に野鳥に関心を持ってもらい、毎月自然観察会も実施しています。

湖北野鳥センター
住所 ●〒529-0365 滋賀県東浅井郡湖北町大字今西地先
TEL ●0749-791289
開館時間 ●午前9時〜午後4時30分
休館日 ●毎週月・火曜日(祝日の場合は順次繰り下げ)
入館料 ●一般(高校生以上) 200円
●中学生以下 無料
●小学生以上 150円
●団体(20名以上)



清水幸男さん
昭和26年生まれ、湖北町在住。日本電気硝子(株)を27年勤務後、湖北町役場に転職。現在、湖北野鳥センター、琵琶湖水鳥・湿地センター専門員。



布施善明さん
昭和20年生まれ、余呉町在住。滋賀自然観察指導者連絡会、日本自然保護協会、自然観察指導員。昆虫・鳥を中心に、木之本町・浅井町などで観察会の講師として活躍中。

「季節の移ろい」を先取りする野鳥は、私たちが「心の潤い」の使者。

余呉から少し南、湖北町まで足を伸ばすと、渡り鳥の姿が増えます。琵琶湖でも珍しい遠浅の湖面が残っている湖北野鳥センター周辺の湖岸は、冬の水鳥の代表であるコハクチョウとガンと一緒に見られる西日本でも2箇所しかない渡り鳥の名所です(もう1カ所は鳥取県中海から鳥根県の宍道湖)。ガン、カモの越冬地、カイツブリ、サギの子育ての場所であり、天然記念物のオオヒシクイやコハクチョウの姿が見られる場所でもあります。

きれいな溪流域にはキセキレイ、中下流域にはセグロセキレイと。ところが、最近ではキセキレイが人家近くで巣を作ることが多く、冬の間下流域で見られなくなったハクセキレイが上・中流域で見られ、余呉町役場に巣を作ったり……キセキレイが余呉町の交流センターのポストに巣を作ったこともあります。清流が汚れ、下流のエサが減るなどの河川の環境の大きな変化が原因じゃないでしょうか」

意外に少ないのが冬の渡り鳥です。余呉湖畔に2〜3年に1回くらいコハクチョウがやってきますが、3〜4日もすると飛び立ってしまいます。湖底が遠浅ではなくすり鉢状になっているため、エサとなる水草が少なからずです。また、かつてはたくさんツグミが渡ってきた余呉ですが、以前ほど姿を見ないと言います。

「余呉湖で比較的渡り鳥が多いのはマコモ、ヨシなどが茂っている埋蔵湖のあたりで、カモ類がたくさんいますよ。皇居のお堀へ引越越しすることで有名になったカモもたくさん、行列して《歩く》のではなく《泳いで》います」

「それでも最近では数が減っていますね。特に夏鳥。この原因は日本一国の問題ではないようです。夏には、南の国から日本へ繁殖のために渡ってきて、冬に東南アジアなどで越冬するのですが、どうやら東南アジアの熱帯雨林の衰退、焼き畑農法や海老の養殖のための伐採などで越冬地の環境が随分悪くなっているようです」(清水幸男さん)

農業をする人が減って暮らしの中の季節感が消えつつある今、鳥の姿は私たちに季節感を取り戻してくれる貴重な存在になっていると清水さんは指摘します。

「鳥の姿を見ていけば四季の移ろいを先取りしながら楽しめますね。京都では冬の象徴であるユリカモメが、琵琶湖では8月末の残暑の時期にやって来て「暑さももう少しだよ」と教えてくれます。冬の真っ最中にはヒシクイが北への旅立ちを始めて春の訪れを告げてくれます。大暑、立秋、処暑などの「二十四節季」が実感として感じられ、心がとても豊かになりますよ」

空を見あげることさえ少ない現代人の生活。鳥たちはそんな私たちに「もっと心に残る余裕を持ったら?」と語りかけてくれているかのようです。